

在校生・卒業生・保護者・教職員

進路通信 2017/07 号外

北海道釧路湖陵高等学校進路指導部

★特集 前回に引き続き、北大入試研究会の内容をまとめます。今回は国語。駿台、河合塾ともに西原先生にレポートしていただきます。

文系の概況（河合）

- ・2017年度入試は文系学部志願者が増加し、難化。
- ・センター試験の文型の平均点UPを背景に、前期受験者の得点率78%以上の受験者が増加。
- ・後期については成績上位者が厚く分布し、難化した。

2017年度入試 合格者の平均点（河合）

- ・センター試験得点率→86.1%（圧縮 258.36点/300点満点）
- ・二次試験（国語）平均点→81.54点/150点満点）
- ・二次試験総合得点率→61.6%
- ・センター+二次試験平均点→519.62点/750点満点

- ・北大はセンター70%を死守！それ以下からの逆転は難しい。
- ・北大オープンで60%の得点を取った者はほぼ、合格している。
- ・北大オープンで40%以下の層からは合格率が格段に下がっている。

現代文

配点→100点（大学発表）
時間配分の目安→80分
出題形式→2800字～3400字程度の文章が2題。設問数は年度によって異なるが、概ね5問ずつ。最大、120字の記述設問。
主題→北大では問題文のジャンルが多岐にわたっている。日頃からあらゆるジャンルに関心を持ち、苦手なジャンルを作らないことが大切である。（駿台）

■ポイント1【漢字・語彙力】

- ・漢字は例年、7問。
- ・今年の出題→1 裏腹 2 土壌 3 正統 4 戦慄 5 随筆 6 亀裂 7 通俗
- 3のように文脈から判断して書かなければならない漢字もあり、日頃から様々な言葉に関心を持っているか試される。6の回答率が低い。平均点は5点。7点の差は大きく、漢字も疎かにできない。（駿台）

■ポイント2【対比関係をつかむ力】

例題 北大現代文設問1 問二「傍線部『啓蒙の時代』とあるが、それはどのような時代として捉えられているか。二十五字以内で答えなさい。」（2017年度）
本文

近代とは、その「啓蒙の時代」というイメージとは裏腹に、妖怪が不可視の厚みを持った人間そのものなかに居場所を定める時代、「内面」を抱えた「私」を土壌として生育する時代であった。そして、現代の人々は、いまだにこの「近代」のなかにいるのである。

表向きは科学的・合理的思考が特権的な位置を占める世界に見えながら、その実われわれの周囲には、「霊」にまつわるさまざまなディスクール（注1）が満ちあふれている。

*注一特定の社会的・文化的な集団・諸関係と強く結びつき、それによって規定される、言語表現、ものの言い方、言説。

解説 傍線部は実情とは裏腹な近代のイメージである。「現代の人々は、いまだにこの『近代』の中にいるのである。」という直後の文から、近代と現代は同じような時代であることがわかる。形式段落②のが現代（今）についてであり、「表向き」と「その実」が対比的に述べられている。②の一行目が、傍線部を含む一文に対応している文である。「表向き～見えながら」という表現が「イメージ」の言い換えであると判断し、「科学的・合理的思考～占める世界」の部分を使い解答する。

正答例「科学的・合理的思考が特権的な位置を占める時代。」（駿台）

*この設問は、傍線部に対し、解答の根拠になる部分が非常に近く、正答率も高い。もっと本文全体に根拠が散らばっているときも対比関係をしっかりと整理して読み、解答をまとめることが大切である。センター試験の問題でも選択肢探しのゲームでは力がかからない。しっかりと自分自身で解答の根拠となる箇所を探していくことが大切である。北大では傍線部の前後のみしか、見ていない人は合格レベルの答案をつくれぬ。

■ポイント3【物事の関係性を整理する力】

例題 北大現代文設問1 問二「傍線部『リアリティの逆転』とあるが、それはどういうことか。八〇字以内で説明せよ。」（2017年度）

本文 だが、江戸時代の人々は幽霊にそこまで特権的な地位を与えていたわけではなかった。（中略）ここには、リアリティの逆転というべきものがみられる。江戸時代の人々にとっては、死者の霊が再び姿をあらわすよりも、狐や狸が人を化かすことのほうがはるかにリアルだったのだ。狐狸が化かすという話をおとぎ話にしか思えない現代人にとっては、もはや共感することが難しい感覚だろう。

現代において、なぜこれほどまでに幽霊のリアリティのみが特権化されてしまったのだろうか。それは妖怪が「自然」に対する畏怖にかかわるものであるのに対して、幽霊は「人間」に対する恐怖にかかわるものであるからだと思われる。「自然」はコントロール可能なものとしてその神秘性を失ってしまったが、「人間」そのものは逆に見とおすことのできない暗い深淵を抱えた不気味な存在として認識されるようになった。

解説 「逆転」とは〈事のなりゆき、優劣関係がそれまでとは逆になる〉という意味である。「逆転」を説明するのだから、ここでは「現代」と「江戸時代」それぞれのことを述べ、逆転関係がわかるようにすることが必要。どちらか一方では不十分。

受験生の解答例 江戸時代においては妖怪の話が身近にあって、死者が再び姿をあらわすのではなく、狐や狸が人を化かしていると考えていたため、妖怪の方がリアルであったということ。→逆転の説明がないので不可。

受験生の感想 ・逆転だったので対比だと思い江戸と現代の相違点を探しました。でも裏返しになってしまい、不安でした。
・自然や人間についての説明を入れてしまった。できたと思ったのに・・・

解答例 ・「江戸時代では死者の霊が復活するよりも狐狸が人を化かす方に現実性を感じていたが、現代では狐狸に関する話は虚構にしか思えず、幽霊を恐れて現実味を感じるということ。」（河合）
・「現代では、幽霊を現実的と捉え狐狸が人を化かすのは虚構だとしか思われていないが、江戸時代には、死者の霊の復活より狐狸が人を化かすほうが現実的だったということ。」（駿台）

＊何が問われているのか、きちんと整理することが一番！解答例の違いも見比べてみよう

■ポイント4【文章全体を要約する力】

例題 北大現代文設問1 問五 傍線部「妖怪や幽霊は近代においては人間の外部にあって『見える』ものであったが、近代においては人間の内面のはたらきによって『見てしまう』ものへと変わったのだ。」とあるが、それはどういうことか。その変容の背景も含めて二〇字以内で説明せよ。(2017年度)

解説
ここでは、本文は省略します。本文はなくてもここまで読んでくれた人は問題文だけで「A→Bへの変容」を対比的に書くんだ！とわかってくれたと思います。北大では「A→B」の変化を出題することが非常に多いです。Aのみで、部分点が与えられているかは不明です。ですから、必ず両方揃えること。また、北大の最後の設問120字記述は本文全体を踏まえて答える問題であることを覚えておいてください。この問題文でも「その変容の背景も含めて」 答えなさい、となっています。要するに「A→Bへの変容」+「全体」を答えるのです。

＊上記の設問に対応する力を身につけるために

- 1 本文で筆者は何が言いたいのか、要約する。
まず、字数は関係なく、筆者の言わんとしていることをまとめていこう。
- 2 次に1の筆者の主張の中で各設問はどの部分を問うているのか、考える。問と筆者の主張を結びつける。(1ヶ所とは限らない)
- 3 解答の柱をつくる。(対比や逆転など)+必要な条件を探す(江戸と現代の考え方など)
- 4 語順をどうするのか考える
- 5 文を完結させる。文が終わっていなければ、採点の対象外。部分点の獲得のためにも文を終わらせましょう。

■日々の学習でやって欲しいこと

たとえ、センター型の問題であっても上記の1～5を意識して欲しい。自分の答えが合っていたか違うかだけに一喜一憂しては点数は上がらない。常に自分自身で筆者の言いたいことをまとめ、何が問われているか考える。解答は大学との対話である。自分はこのように考えたのだ。このように考えたことを表現できる人間なのだということを伝えるために、試行錯誤し、新しい語彙の獲得に努め、日々努力を重ねよう。

古文

配点→25点(大学発表)
時間配分の目安→20分
出題形式→620字～770字程度の文章が1題。設問数は年度によって異なるが、概ね4～5問ずつ。最大、70字の記述設問。
主題→中世や近世の作品からの出題が目立っていたが、2015・2016は中古の作品から出題された。基本的な文法や単語の知識が重視された設問も多いが、その一方で本文の趣旨を的確に把握しているかどうかを問う説明問題も出題されている。(河合)

■ポイント1【単語・文法の力】

今年の出題→ 1 命をとどめて 2 本意なかりしに 3 さらに人を恨むる心なし。
まず、単語一語一語の意味をきちんと逐語訳できることが大切である。また、センターでも同じであるが、傍線部だけでなく、前後の文脈から意味をとることが大切である。1「とどむ」の意味を誤解した人が非常に多かった。前後の流れから、終わらせると訳さなければならなかつた。

った。2は「に」の訳をやはり、文脈にそって訳す必要がある。3は人が誰であるの明らかにする必要がある。

■ポイント2【本文の首題の把握】

今年の出題では「眼を抜き取らん」「眼を入れ給はず」の表現が何を意味しているかわかった受験生とわからなかった受験生で勝敗が分かれている。注より、この本文の首題は楽の秘技伝授であるとわかる。そこから、「眼を入れる」ことが秘技伝授のことであると推測しなければならなかった。北大では全体のテーマに基づき、分からない箇所の意味を考えていく力が求められている。

■日々の学習でやって欲しいこと

まず、基本的な単語・文法の習得。また、その知識を使って全体を読み取る練習。その際、気をつけることは場面ごとの登場人物の出入りや、何をしているのか整理する。意味の取りにくい表現があってもあわてずに前後の内容や本文のテーマと関連づけて推測していく。また、古文常識も一つひとつ覚えていこう。

漢文

配点→25点(大学発表)
時間配分の目安→20分
出題形式→180字～250字程度(句読点抜き)の文章が1題。設問数は年度によって異なるが、概ね4～5問ずつ。最大、75字の記述設問。
主題→文系学部で出題問題が統一された2006年度以降の出題を見てみると、奇談のような小説的文章と、説話・随筆・書簡などの論説的な要素を含む文章の双方が出題されているが、最近では後者の割合が多くなっている。論説的な文章の読解練習が必要。どちらかというセンターに出題されている文に近い。(駿台)

■ポイント1【北大の漢文は出題形式が変わっていない】

重要語の読み→ 「幾」(いくばく・ほとんどなど)「為」(つくる・おさむなど)等、読み方が何通りかあり、文脈から決定する必要がある文字の出題がある。
「於是」など二字の読み方も多く出題される。
書き下し→例年は返り点付きだが、白文の時もある。平仮名書き、歴史的かなづかいを求められる。句形・重要語を問うパターン、文脈にそった訓読を問うパターン(「願」の文末が意思か命令形かなど)、対句表現から読み方を類推させるパターンなどがある。
現代語訳→例年、送り仮名返り点付きで問う。特殊な表現や漢字の語彙力を問うことも多い。また、省略された主語・目的語、代名詞の指示内容を補って訳すことが求められることも多い。四文字熟語が問われることもある。
記述問題→例年、本文の最後に傍線部が引かれ、七十五字の記述問題が出される。抽象的な語を具体的に説明させたり、指示代名詞の内容を具体化させる。理由説明や、逸話の流れに沿って要約させる設問が出題されることもある。

■ポイント2【北大の漢文は同じ句形や語句が繰り返し出題される】

同じ主題形式で何年かおきに同じ句形や重要語彙が繰り返し、出題されているので、過去問を解くことが大切である。

■日々の学習でやって欲しいこと

まず、基本句形・重要語の知識を完全に。読解では送り仮名を読み飛ばしている人が多いが、古文における助詞や助動詞の働きをしているので疎かにできない。主語や指示語の内容に常に気を配り、論説的な文章では対句や対比の構造を意識しながら読む。漢文は古文とは違う世界観があるので、常識に引きずられると読み間違い。だから、丁寧に思い込みを捨てて読んでいく必要がある。